

定時制高校に進学する生徒の変容に関する研究 — X 定時制高校を事例として —

Study on the Transformation of Students Going to Part-time High School
— Case Study of X Part-Time High School —

西 村 貴 之
Takayuki NISHIMURA

I. 問題設定

戦後、勤労青少年や青年期の教育機会を奪われた者の後期中等教育を受ける機会を保障する教育制度として設置された定時制高校は、今日かような層の減少にともない他校との統廃合による閉課程などによりその数・規模を縮小しながらも、より多様なニーズに応える役割を担うようになってきている。定時制に在籍する生徒数はバブル崩壊以降の1997年から20年間、およそ3%で推移している¹⁾。とりわけ夜間定時制高校にはひとり親世帯等経済的困窮世帯出身者、全日制高校不合格者、中途退学者、不登校経験者、心身に障害のある者、児童養護施設入所者、学齢期を過ぎて再び学びを求めてくる者そして外国につながる若者など社会的排除のリスクの高い層が多く入学している。

他方、定時制とともに後期中等教育制度の周縁にありながら上述のようなマイノリティーの若者の教育機会を保障している通信制高校は、全日制や定時制の学校数が漸減していくのとは対照的にその数を増やし、多くの若者を受け入れている。特筆すべきは、その増

加は私立学校（株式会社立を含む）でみられるということである。2003年度公立と私立とで学校数が逆転し（公立68校・私立70校）、2018年度公立の78校に対して私立は174校まで増加している。通信制は15～19歳の生徒の割合が2016年度以降8割を超えて推移しており、公立と私立とではその割合に差が表れている。私立の9割を超える生徒は中学卒業後ストレートに進学しているのに対して、公立は5割程度にとどまる。高校中退等過年度層を公立は相対的に受け入れている傾向がみられる。高等学校等就学支援金制度が2014年度からスタートしたとはいえ、経済的困窮世帯出身の若者にとっては私立の通信制高校に通学することはハードルが高いため、ひとくくりに通信制高校をとらえることには注意が必要である。

今日の定時制・通信制高校は、わが国の後期中等教育制度の周縁にありながらこれらの高校に入学を希望する/せざるをえないマイノリティーの若者の教育機会を保障している制度として看過できない役割を担ってきているが、とりわけ通信制高校のニーズが年々高まっている。こうした高校教育を取り巻く社会

の変容のもとで、公立定時制高校に今日どのような生徒層が入学しているのだろうか。本研究はそれを明らかにすることを試みる。

Ⅱ. 研究の方法

本研究では、A県にある政令指定都市B市立の全定併置校であるX高校定時制課程（以下、X定時制）に2017年度1学年から3学年に在籍する生徒を対象とした定量的調査を実施した。2018年1月～2月に、学校生活や家庭生活に関する質問紙を各学年のホームルーム担任から対象生徒に配布してもらいホームルーム時に回答してもらった（回答数74名、有効回答率67.9%：1学年19名（当該学年回答率61.3%）、2学年24名（当該学年回答率77.5%）、3学年31名（当該学年回答率77.5%））。分析には、IBM SPSS Statistics ver.20を用いた。

なお、X定時制に関しては、筆者も参加した「若者の社会的包摂研究会」（研究代表 宮本みち子前放送大学教授）が2009～2011年度に定性ならびに定量調査を実施している。当時在籍していた生徒（1学年・4学年）ならびに卒業生、教員集団を対象とし、主に4学年次の進路動向について調査を行った（なお、この研究会はその調査期間中2009年度B市とX定時制に関する協働研究調査を実施している）。本研究で実施した質問紙調査票の項目はこの「若者の社会的包摂研究会」が作成した調査項目をベースに作成している。

Ⅲ. 2002年度以降のX定時制が置かれた状況

調査結果の分析に入るまえに、市立高校におけるX定時制の位置について整理する。B

市立高等学校再編整備計画前期計画（平成12～16年度）によって、5校あった定時制のうち4校が全日制1校と統廃合され、平成14年度より全日制課程の単位制総合学科高校と定時制課程の単位制総合学科高校に再編整備された。X定時制は、B市西部地域の生徒の教育機会を保障する観点から前期計画期間中に検討する対象となり全日制併置のまま存続が決定した。続く後期計画（平成17～21年度）においても、設置趣旨である働きながら学ぶ勤労青少年や夜間定時制を希望する公立中学校卒業予定者数が減ってきているものの、県立高校改革の動向を配慮しながら「当面は志願者の状況を見守りながら存続」という判断がなされた。市立の定時制高校はX定時制を含む2校のまま今日にいたっている。

さて、X定時制は再編整備の対象とはならなかったものの、学校づくりはその影響を受けることとなった。2002年（平成14年度）、当該計画を含むA県の公立高校改革の影響によって定時制志願者が急増し大量の不合格者を出さざるをえない状況に陥ったことを受け、県立ならびにC市の市立高校の定時制とともにX定時制は募集定員枠を拡大する措置をとった。X定時制は定員140名に加えて70名追加募集を実施し、02年度の1学年は217名（原級留置含む）でスタートした。

A県の高校入試をめぐる混乱に巻き込まれたX定時制の在籍者数は、2002年度以降どのように推移しているのか。B市教育委員会が各年度5月1日現在のデータをもとに公表している「市立学校現況」をみていこう（図1）。原級留置の生徒数が含まれた数値ではあるが、2002～2007年度までは1学年の生徒数は定員140名を超えていた。「若者の社会的包

摂研究会」の調査によれば、この期間は大幅な定員増の結果、教員集団は入学生の問題行動が頻発し毎日生徒指導に関する緊急会議が開かれ対応に追われていたという。そして、かような状況のもとで、教員集団は、X定時制で課題となっていた中途退学者ならびに進路未決定者を減らすための組織的な体制づくりに着手する。「生活をまず安定させるリズムを作る。その延長線上に目標を定めて学習をして自己実現を図っていく」というガイダンス指導を02年度に全日制から異動してきたI教諭が導入し、校内研修を通して同僚の理解を得ながら、04年度「ガイダンス部」という分掌がつくられた³⁾。

2008年度から2014年度まで定員充足率が7割から9割で推移していた。この期間は少し混乱が収拾してきた時期であり、2007年度からガイダンス部主任を引き継いだK教諭は、各年次の核となるガイダンスの内容を系統的にとり入れるなどさらなる支援体制の充実を図っている。しかしながら、発達障害など学校から仕事への移行支援が難しい層に対してはなかなか手が届かないでいたため、K教諭

はじめガイダンス部の教員たちは校外の若者支援機関との連携・協働による切れ目のない支援体制を拡充する試みをはじめた⁴⁾。

2015年度から2018年度（現在）は定員を5割以上下回る状況で推移している⁵⁾。その影響により2016年1学年ならびに2学年次の学級数が4から2クラス減となっている。2017年度管理職だったT校長代理によれば、「若者の社会的包摂研究会」が調査を実施した時期の教員集団は1名を除いてすべて他校へ異動しているとのことだった（2009～2011年度の本務教員数は33名。2017年度は32名、2018年度には29名と減じている）。次節でこの激減期にあたる2017年度在籍生徒の調査結果をみていこう。

IV. 結果

4-1 属性

まず、対象者の属性を定時制に関する言説でよく用いられる視点（過年度入学生、中学時の不登校経験者、低学力層、働きながら学ぶ層、進路未決定状況、ひとり親世帯ならび

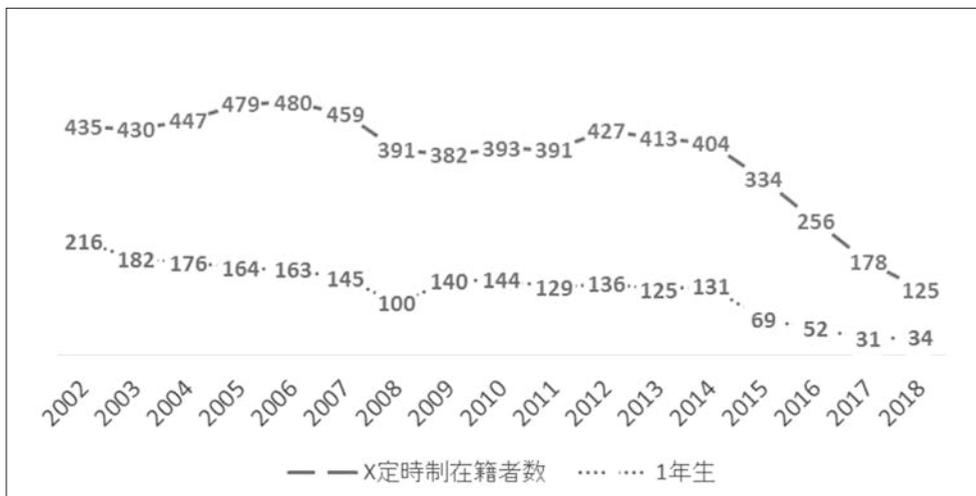


図1 在籍者数推移

表1 基本属性

	N	%		N	%
① 学年別			⑦ 中学病気以外の遅刻欠席なし (n=67)		
1 学年	19	25.7	あてはまる	30	44.8
2 学年	24	32.4	あてはまらない	37	55.2
3 学年	31	41.9	⑧ 現在の就労状況 (n=73)		
② 性別			している	37	50.7
男	39	52.7	していない*2	36	49.1
女	21	28.4	*2: 未就労者(n=35)中、在学中就労希望者は27名(77.1%)。現在求職中の者は27名中17名(63.0%)。		
無回答	14	18.9	⑨ 卒業後の進路希望 (n=73)		
② 年齢別			大学進学	5	6.8
15-18歳	64	86.5	専門学校	12	16.4
19-21歳	9	12.2	正社員	21	28.8
32歳	1	1.4	フリーター	1	1.4
④ ストレート入学か過年度入学か			家業を手伝う	2	2.7
ストレート*1	56	75.7	未定*2	32	43.8
過年度	18	24.3	*1: ストレート入学者の中には、当該入学年度に他校からX定時制に転編入した1名が含まれる。 *3: 「進路未定」は、1年9名(47.4%)、2年9名(31.5%)、3年14名(45.2%)。		
⑤ 過年度生 (n=16) の直前していたこと			⑩ 家族構成		
全日制在籍	5	31.3	単身世帯	1	1.4
通信制在籍	4	25.0	両親世帯	36	48.6
浪人	3	4.1	母子世帯	30	40.5
就職(アルバイト含む)	3	4.1	父子世帯	4	5.4
その他	1	1.4	その他世帯	3	4.1
⑥ 中学時の成績 (n=71)			⑪ 暮らし向き (n=70)		
上位	5	6.8	ゆとりがある	13	18.6
中位	2	2.7	ややゆとりがある	33	47.1
下位	41	55.4	やや苦しい	19	27.1
欠席が多く回答不能	23	31.1	苦しい	5	7.1

に経済的困窮状況等)に関する項目に注目しながら記述しよう(表1)。74名の回答者の学年分布は、3年生がおよそ4割と最も多い。続いて2年生(32.4%)、1年生(25.7%)である(表1-①)。性別は男子生徒の回答率が5割である(女は28.4%、無回答18.9%)(表1-②)。年齢別では、1学年から3学年を対象とした本調査では、その学年の年齢に該当する15~18歳が86.5%である(表1-③)。中学を卒業してすぐにX定時制に入学したいいわゆるストレート進学者の割合は75.7%であり、当該年度の調査対象者の中で過年度層は

24.3%である(表1-④)。過年度層で転編入してきた者は9名おりX定時制も定時制・通信制高校(とくに公立)が果たしてきた他校をなんらかの理由で継続ができない層を受け入れる役割を担っている(表1-⑤)。その中でも通信制高校から移ってきた者が4名いる点は看過できない。上述のとおり近年の通信制高校(とくに私立広域通信制)のニーズが高くなっている状況において、通信による教育スタイルになじめなかった若者が再び通学による教育を受けるために定時制高校に再入学している状況については今後丁寧に調査し

ていく必要がある。

定時制高校の生徒の中には入学以前の学校において不登校を経験してきた者が少なくない。また多くの学校で低学力の生徒のために基礎学力の定着を図る授業を展開している。本調査では対象者の自己認識に基づく中学時代の出席状況と成績についてたずねる項目がある。その結果からは、定時制の生徒に関する一般的な言説と同様の傾向がみられる。病気等の理由以外の遅刻欠席をしない生徒は44.8%にとどまる。成績に関しても欠席が多く自己の成績に関して評価ができない者と成績が「下」と回答した者をあわせると90.1%になる。過半数もの生徒が不登校経験をしており、生徒の大半が中学時の学力不振を認識している（表1-⑥、⑦）。

彼ら彼女らのおよそ5割が働きながら学んでいる。未就労者の中で在学中に就労を希望する者は77.1%おり、調査時点で求職中の者がおよそ6割いる（表1-⑧）。調査時点の卒業後の進路希望で一番多かったのは「進路未

定」の43.8%である。続いて「正社員」が28.8%、中等教育後教育機関進学が23.2%（うち「専門学校」が16.4%）である（表1-⑨）。とりわけ1年生（47.4%）とほぼ同じ割合で3年生の45.2%が4学年に進級する直前の時点で進路未定の状況にある点は看過できない。

最後に生徒の家庭環境について。定時制高校に通う生徒の特徴として、ひとり親世帯出身者が多い点がよく指摘される。とりわけ母子世帯は経済的に困窮しているケースが多く、それゆえに定時制高校に進学することは「子どもの貧困」を結びつけられて語られることが少なくない⁶⁾。本調査においても、その傾向はうかがわれる。回答者の家庭の45.9%がひとり親世帯であり、その大半が母子世帯である（表1-⑩）。現在の家族の経済状況を「苦しい」と回答する者がおよそ3割にもおよぶ（表1-⑪）。

次に74名の生徒たちの入学理由をみよう（表2）。およそ4割の生徒が高校卒業の資格

表2 入学理由（複数回答）（n=74）

	N	ケースの%
定時制しか選べなかったから	34	45.9
高校卒業の資格が必要だから	30	40.5
定時制がよいと思ったから	25	33.8
学校の先生にすすめられたから	25	33.8
自宅から近いから	24	32.4
働きながら学ぼうと思ったから	23	31.1
親にすすめられたから	18	24.3
全日制入試に失敗したから	13	17.6
授業料が安いから	13	17.6
他の高校を中退したから	8	10.8
きょうだいや友だちが通っているから	8	10.8
友だちにすすめられたから	4	5.4
友だちが行くから	4	5.4
その他	4	5.4
働いているうち高校へ行きたくなった	2	2.7
合計	255	344.6

表3 この高校は自分が望んだ進学か (n=74)

	N	%
望んだ	25	33.8
どちらかといえば望んだ	35	47.3
どちらかといえば望まなかった	9	12.2
まったく望まなかった	5	6.7

が必要なため入学している (40.5%)。「定時制しか選べなかった」と回答した者は全体で45.9%おり、「定時制がよいと思った」(33.8%)と重複回答した者(12名)を除くと、他の選択肢がないためX定時制に入学した者は22名(29.7%)いる。およそ3割で回答があった項目が、「自宅から近い」(32.4%)、「働きながら学ぼうと思った」(31.1%)、「学校の先生にすすめられた」(33.8%)である。X定時制は自分自身が望んだかをたずねた項目をみると、進学希望者(「望んだ」「どちらかといえば望んだ」)が全体のおよそ8割を占め、不本意入学者(「どちらかといえば望まなかった」「まったく望んでいなかった」)は2割程度にとどまる(表3)。

4-2 高校生活の状況

調査対象の高校生活についてみたい。なお5%水準で有意な結果をもとにしている。

(1) 自ら望んで入学したか × 高校生活

X定時制に自ら望んで入学した者(以下、進学希望者)の中で、「中学ではできなかった学校生活を高校では楽しみたい」と思いながら高校生活を送っている者が6割いるが、不本意入学者ではそう思う者がおよそ3割にとどまる(表4-①)。また、進学希望者には、「遊びなどいっしょに過ごす友だち(学内外)」がいる者がおよそ8割おり、不本意入学者の57.1%を大きく上回る(表4-②)。それに対して、不本意入学者は、相対的に「学校はい

つも退屈」、「高校生活すべての面で、興味もやる気も起きない」と感じる者が64.3%おり、進学希望者と比べて高校生活が不活発な状況がうかがわれる(表4-③, ④)

(2) いじめ経験 × 高校生活

いじめを受けた経験をもつ定時制の生徒は少ない。本調査でも中学時代にいじめを受けた経験者がおよそ2割いる(15名)。いじめを受けた者は、いじめを受けていない者(81.8%)と比べて「学校に、よく話を聞いてくれる友だちがいる」と感じる割合が少ない(53.3%)。とはいえ、つらい経験を有する彼ら彼女らが、再び学校で他者とともに集団生活を送ることに心理的負荷を強く感じながらも半数程度が学校内に話し相手が見つけれられているとも解釈が成り立つ。また、中学時代不登校だったため「欠席が多く答えられない」と回答した者(以下、不登校経験者)も、いじめられた経験のある者と同様の傾向がみられる(46.2%)。この者たちも小学校時代にいじめを受けた経験があるなどなんらかの理由で中学校に通うことができない状況にあった点を鑑みた場合、その半数程度に話し相手ができているという解釈もできよう(表5-①)。

いじめを受けた経験をもつ者は、「困ったときに、アドバイスや必要な情報をくれる人がいる」と答えた者がおよそ7割いる。いじめの経験がない者と比べると12.7ポイント低い頼りになる存在が身近にいることがわか

表4 X定時制に自ら望んで入学したかどうか × 高校生活

① X定時制進学希望 × 中学ではできなかった学校生活を高校では楽しみたい			
	楽しみたい		合計 (n=72) 有意確率0.024
	あてはまる	あてはまらない	
進学希望者	35 (62.1%)	22 (37.9%)	58 (100%)
不本意入学者	4 (28.6%)	10 (71.4%)	14 (100%)
② X定時制進学希望 × 遊びなどいっしょに過ごす友だちがいる (学校の内外を含む)			
	遊ぶ友だちがいる		合計 (n=72) 有意確率0.039
	あてはまる	あてはまらない	
進学希望者	48 (82.8%)	10 (17.2%)	58 (100%)
不本意入学者	8 (57.1%)	6 (42.9%)	14 (100%)
③ X定時制進学希望 × 高校生活すべての面で、興味もやる気も起きない			
	無気力		合計 (n=72) 有意確率0.014
	あてはまる	あてはまらない	
進学希望者	17 (29.3%)	41 (70.7%)	58 (100%)
不本意入学者	9 (64.3%)	5 (35.7%)	14 (100%)
④ X定時制進学希望 × 学校はいつも退屈だ			
	無気力		合計 (n=72) 有意確率0.041
	感じる	感じない	
進学希望者	20 (34.5%)	38 (65.5%)	58 (100%)
不本意入学者	9 (64.3%)	5 (35.7%)	14 (100%)

る(とはいえ、26.7%が「いない」という点は看過できない)。それに対して、不登校経験者の中で、高校生活において頼りになる存在がいると答えた者の割合は46.2%にとどまる。中学時代にいじめを受けた者と比べると、不登校経験者の中には困ったときに助けが得られないリスクを抱える者がいる(表5-②)。

いじめを受けた経験をもつ者(93.3%)と不登校経験者(84.6%)の大半が、「定時制ということで世間からあまり評価されないとと思う」という項目で「あてはまる」と答えている。彼ら彼女らの多くが定時制希望者(いじめられた経験者の80%・不登校経験者の92.3%)であり、高校生活を積極的に送っている分、定時制高校に対する評価が低い点が気になっているという解釈が成り立つ。他方いじめの経験がない者で「あてはまる」と答えた者は46.5%にとどまる(表5-③)。

(3) 学習能力 × 高校生活

個人の能力をたずねる「読み書きをする」「計算をする」「パソコンでワードやエクセルを使う」の3つの変数を「学習能力スコア」と合成する(a 係数は0.781)。学習能力スコアと高校生活のクロス表をみると以下のような有意な結果がみられた。学習能力スコアが中位と下位では「勉強がわかる」にあてはまる生徒の割合がおよそ7割を超えるが、上位は5割にとどまる。また出席状況をみると、中位と下位は「病気以外の遅刻欠席をしない」にあてはまる割合がおよそ7割を超えるが、上位はわずか35%にとどまる。基礎的な学習に関する能力が中位以下になると遅刻欠席をせずに通う者が多く、かつX定時制において勉強がわかるという経験を得られている。

(4) 働きながら学ぶ状況

4章1節で前述したとおり、調査対象者の

表5 中学時代いじめの経験 × 高校生活

① いじめを受けた経験 × 学校に、よく話を聞いてくれる友だちがいる			
	話を聞いてくれる友だちがいる		合計 (n=72) 有意確率0.016
	そう感じる	そう感じない	
経験あり	8 (53.3%)	7 (46.7%)	15 (100%)
経験なし	36 (81.8%)	8 (18.2%)	44 (100%)
欠席が多く答えられない	6 (46.2%)	7 (53.8%)	13 (100%)
② いじめを受けた経験 × 困ったとき、アドバイスや必要な情報をくれる人がいる			
	アドバイスや必要な情報をくれる人がいる		合計 (n=71) 有意確率0.012
	あてはまる	あてはまらない	
経験あり	11 (73.3%)	4 (26.7%)	15 (100%)
経験なし	37 (86.0%)	6 (14.0%)	43 (100%)
欠席が多く答えられない	6 (46.2%)	7 (53.8%)	13 (100%)
③ いじめを受けた経験 × 定時制ということで世間からあまり評価されないと思う			
	評価されない		合計 (n=71) 有意確率0.001
	あてはまる	あてはまらない	
経験あり	14 (93.3%)	1 (6.7%)	15 (100%)
経験なし	20 (46.5%)	23 (53.5%)	43 (100%)
欠席が多く答えられない	11 (84.6%)	2 (15.4%)	13 (100%)

表6 学習能力スコア × 高校生活

① 学習能力スコア × 勉強がわかる			
	勉強がわかる		合計 (n=71) 有意確率0.047
	あてはまる	あてはまらない	
上位	10 (50.0%)	10 (50.0%)	20 (100%)
中位	20 (74.1%)	7 (25.9%)	27 (100%)
下位	20 (83.3%)	4 (16.7%)	24 (100%)
② 学習能力スコア × 病気以外の遅刻や欠席をしない			
	遅刻欠席なし		合計 (n=71) 有意確率0.000
	あてはまる	あてはまらない	
上位	7 (35.0%)	13 (65.0%)	20 (100%)
中位	24 (88.9%)	3 (11.1%)	27 (100%)
下位	17 (23.9%)	7 (29.2%)	24 (100%)

表7 就業力スコア × 現在就労しているか

	現在仕事をしているか		合計 (n=71) 有意確率0.007
	あてはまる	あてはまらない	
上位	5 (26.3%)	14 (73.7%)	19 (100%)
中位	10 (41.7%)	14 (58.3%)	24 (100%)
下位	20 (71.4%)	8 (28.6%)	28 (100%)

半数が働きながら学ぶ勤労青少年である。X定時制に通いながら働く生徒たちの状況をみてみよう。個人の能力をたずねる「時間をきっちり守る」「自分でアルバイトを探す」「履

歴書を書く」「面接を受ける」の4つの変数を「就業力スコア」と合成する（ α 係数は0.817）。就業力スコアが下位の者ほど在学中に就労している割合が高い（上位26.3<中位

表8 働く理由（複数回答）（n=36）

	N	ケースの%
自分のおづかいがほしいから	25	69.4
自分の生活費をかせぐため	18	50.0
社会経験をしたいから	13	36.1
親の家計を助ける	12	33.3
ひまだったから	8	22.2
その他	2	5.6
友だちにさそわれたから	1	2.8
合計	79	219.4

41.7<下位71.4）（表7）。なお表は割愛するが3学年はその傾向が強い（上位14.3<中位62.5<下位85.7。有意確率0.006）。次に働く理由をみると、「自分のおづかいがほしい」が全体のおよそ7割と最も回答数が多い。「自分の生活費をかせぐ」の5割、「親の家計を助ける」のおよそ3割と、保護者に経済的に頼ることができないもしくは経済的に支えるために働きながら学ぶ者がいる。また「社会経験をしたい」者がおよそ3割おり、就業力が低い者の中には在学中に仕事の世界を知りたいと思う者が一定数いると推測しうる。

（5）現在の悩み、進路

現在抱えている悩みについては、「卒業後の進路」（67.2%）が最も多い。4章1節で述べたが、調査時点で卒業後の進路未定の者がおよそ4割いる点と符号する。次に多かった回答が「お金のこと」（48.4%）である。卒業後の進路希望と「お金のこと」のクロス

表9 悩み（複数回答）（n=64）

	N	ケースの%
卒業後の進路	43	67.2
お金のこと	31	48.4
心や体のこと	17	26.6
家族のこと	14	21.9
現在の仕事上のこと	8	12.5
その他	4	6.2
合計	117	182.8

表では、進学を考えている生徒のおよそ8割が経済的な面で不安を覚えていることがわかる。進路未定者の三人に一人にも同じ悩みがあることを鑑みると、経済的な面が進路選択に与える影響は看過できない（表10、11）。

X定時制を含め定時制や通信制をはじめ多くの高校では、生徒が抱える悩みに対して、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーをはじめ他の専門職との連携・協働による相談支援体制が整えられてきている。「困りごとや相談できる専門家を知っているか」を問う項目では、知っている者は43.8%にとどまっている。3章で言及したようにX定時制には2007年度以降積極的に校外の若者支援機関と連携・協働しながら、ドロップアウト防止や学校から仕事への移行に関する支援体制を整えてきている。しかしながら、現在生徒たちの中にはそのような支援体制が十分に周知されていないのかもわからない。さらに「専門家の情報を知りたい、あるいは利

表10 進路 × お金のこと

	お金のことについての悩み		合計（n=73） 有意確率0.001
	ある	ない	
就職	6（25.0%）	18（75.0%）	24（100%）
進学	14（82.4%）	3（17.6%）	17（100%）
未定	11（34.4%）	21（65.6%）	32（100%）

用したいか」を問う項目では、〈ぜひしたい・できればしたい〉者は23.6%、〈あまりしたくない・まったくしたくない〉者は47.2%、〈わからない〉者は29.2%であった。わからないと迷っている者を含めるとおよそ5割の生徒に支援のニーズがあると推測しうる。

V. 考 察

X定時制に通う生徒たちにはどのような傾向がみられるのだろうか。これまでの分析結果もとに考察する。まず中学を卒業してストレートに進学する者が大半ではあるものの、過年度入学者がおよそ五人に一人在籍している。およそ5割の生徒は中学時代不登校を経験している。また中学時の学力不振の生徒がおよそ9割いる。一人親世帯出身者が45.9%おり、その大半が母子世帯の生徒たちである。経済状況が苦しい家庭出身者が3割いる。働きながら学ぶ者が5割いる。X定時制に入学した理由で多かったのは「高校卒業の資格が必要だから」「定時制しか選べなかった」「定時制がよいと思ったから」であった。X定時制は、夜間定時制がこれまで受け入れてきた層の若者たち一学び直しの教育機会を求める者、それ以前の否定的な学校経験（学びのアイデンティティを傷つけられてきた、学校に安心して通えなかった等）をもつ者や経済的困窮世帯出身者一を受け入れる教育機関として機能していることがわかる⁷⁾。こうした調査対象者の属性をもとにクロス集計で有意な確率となった結果をもとに以下の解釈を再整理する。

ア) 定員率を大きく下回るX定時制で教育を受けることを自ら望んで進学した者は、X定時制に行かざるをえなかった不本意入

表11 悩みを相談できる専門家を知っているか (n=73)

	N	%
知っている	32	43.8
知らない	41	56.2

表12 専門家の情報を知りたい・利用したいか (n=72)

	N	%
ぜひしたい	4	5.6
できればしたい	13	18.1
あまりしたくない	19	26.4
まったくしたくない	15	20.8
わからない	21	29.2

者と比べて積極的に学校生活を送ろうとする者が多い。それに対して不本意入学者の高校生活は不活発である。

イ) 中学時代いじめを受けた経験者や不登校経験者は、X定時制高校生活を送ることを通して、友人関係や頼れる関係性を少しずつ構築している。そのような肯定的な体験があるため、定時制高校が評価されないという思いが強い。

ウ) 基礎的な学習に関する能力が低い生徒ほど、X定時制の授業をとおして学習理解が深まる経験が得られ通学意欲が高まる。逆にかような能力が高い生徒は物足りなさを感じて学校をサボりがちになる。

エ) 就業力が低い者ほど働きながら学ぶ者が多い傾向にある。その中には保護者に経済的に頼ることができないため自分の生活費を稼ぐ者や自分が働くことで経済的に家族を支えている者がともにそれぞれ3割いる。また、就業力が低い者の中には在学中に仕事の世界を知りたいと思う者が一定数いる。

オ) 卒業後の進路の悩みを持つ者が7割弱おり、経済的な問題を抱える者も5割弱いる。とりわけ進学を希望する者にとっては進学にかかる費用で悩む者が8割いる。校外の専門機関の存在は生徒の半数程度しか認知

されていない。とはいえ、専門家の情報や利用のニーズは潜在的な層を含めると調査対象者の5割程度いる。

まとめにかえて

本論では、近年大幅に在籍生徒数が減少している都市部の夜間定時制高校に通う生徒の特徴を量的調査によって明らかにすることを目的とした。全学年を対象としていない、かつ経年的に生徒の動向を追う調査ではないため、正確な実態把握とはいいがたい。しかしながら、調査の制約のもとで、仮説的な知見を見出した。今後は、この仮説をもとに質的調査を含め丁寧な追調査をする必要がある。また、調査対象学年（本研究では4学年に調査が行えなかった）や実施時期等異なるため厳密な比較ができないが、大幅な生徒減少期をむかえる以前に在籍していた生徒層と比べて、現在のX定時制にはどのような生徒層が在籍しているのか結果を比較しながらより詳しい傾向を示していきたい。

とりわけ仮説的知見の1つとして言及した、生徒が抱える困りごとや悩みに対する相談支援についての認知の低さならびに潜在的ニーズに関わって、X定時制において2007年度以降整えていった多職種連携・協働による体制が、今日どのようなかたちで継続しているのかについては追調査を実施し、不安定を生きる若者を定時制がどのように支援していけるのか検討していく予定である。

研究助成

本研究は、JSPS科研費JP17k04637の助成

を受けて実施した。

謝 辞

本研究にご協力いただいたX定時制の生徒のみなさまならびに教職員のみなさまに心より感謝申し上げます。

註

- 1) 各年度の「学校基本調査」より筆者算出。なおリーマンショック後の2010年と2011年はともに4%に増加した。2016年度の定時制生徒数は93,168名（全日制定時制合計3,309,342名）。
- 2) 詳しくは拙稿（西村, 2010, 2011）を参照されたい。
- 3) 前掲註2)
- 4) 前掲註2)
- 5) B市西部地域の中学生の中で潜在的にX定時制に入学する/せざるをえない層が減り、近隣の県立を含めた高校に進学したのか、あるいは前述の通信制高校（主に私立の広域通信制）の進学者が増えたのかは現時点では言及できない。今後の調査の課題としたい。
- 6) 詳しくは拙稿（西村, 2017）を参照されたい。
- 7) なお、前述の「若者の社会的包摂研究会」が2009年度に当時4学年の生徒（75名）を対象に実施した調査では、入学理由として「授業料が安いから」を選ぶ者が38.7%いた。また家族の暮らし向きについて50.7%の者が苦しいと答えていた。単純には比較できないものの10年前に在籍していた生徒

たちの置かれている状況はより困難であったことがうかがわれる。前掲註2)

引用参考文献

- 1) 西村貴之：「ガイダンス部」の取り組みを軸にした学校づくりへ，地域における学校から社会への若者の包括的支援の検討，平成21年度政策の創造と協働のための横浜会議協働研究調査報告書，53-66，2010.
- 2) 西村貴之：地域における学校から社会への若者の包括的支援の検討～横浜市立戸塚高等学校定時制課程の進路指導を軸にした学校づくりに注目して～，調査季報，Vol.168，52-55，2011.
- 3) 西村貴之：子どもの貧困に抗する多職種連携型支援—チーム学校に関する予備的考察，人間と教育，No.95，56-63，2017.